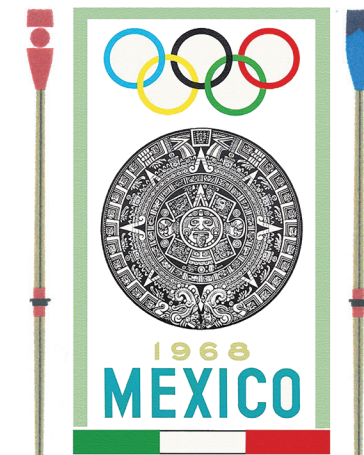


メキシコオリンピック 出漕50周年

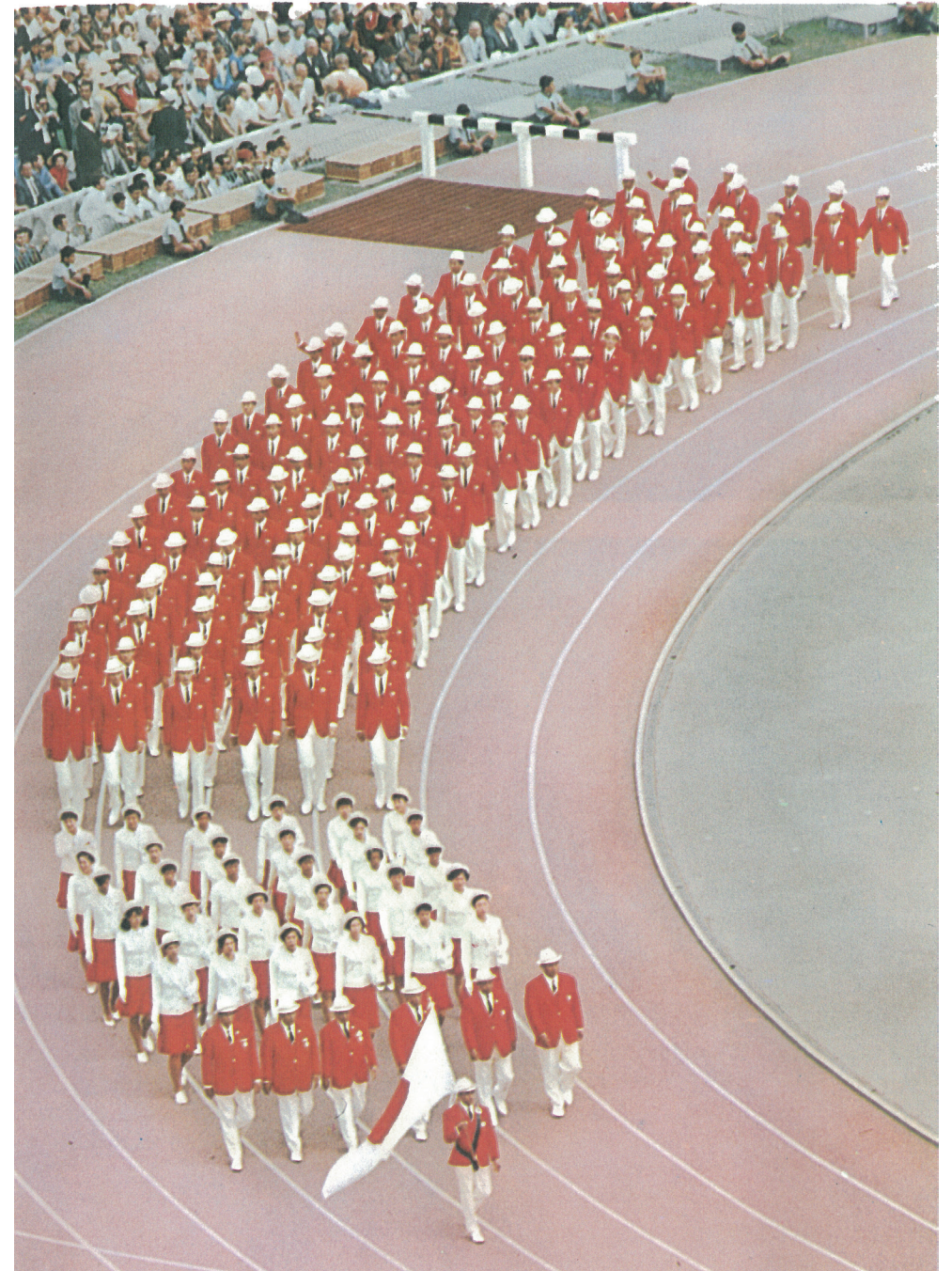
四方 久男さんを偲んで



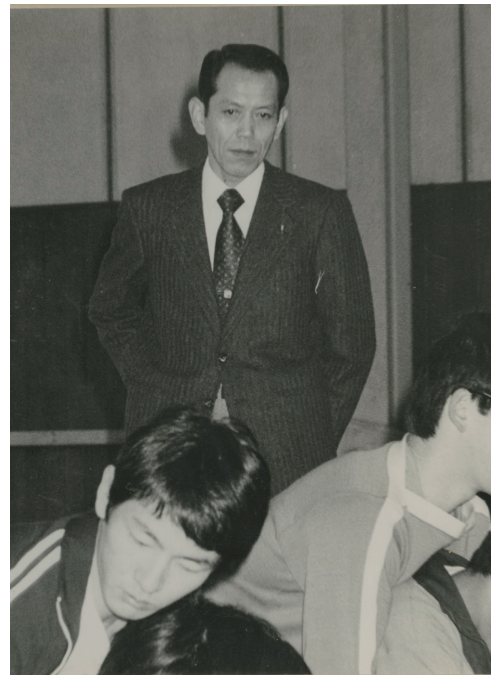
発行 同志社艇友会



1968年
第19回 メキシコオリンピック







四方 久男さん略歴

1927年(昭和 2年) 京都市下京区生まれ
1944年(昭和19年) 4月同志社経専(高商)へ入学と同時に
ボート部へ入部 同年9月動員され兵役に就く
1945年(昭和20年) 10月復員 同志社高商授業再開、2年生として復学
ボート部主将として再建に着手
1946年(昭和21年) 3月練習再開する 同年11月の第一回全日本選手権エイトにて東大に次いで2位となる
1950年(昭和25年) 3月同志社大学卒業
1964年(昭和39年) 同志社大学ボート部監督に就任
1966年(昭和41年) 全日本選手権エイト第3位
1967年(昭和42年) 全日本選手権エイト第2位
1968年(昭和43年) 監督就任5年目、全日本選手権エイトで初優勝、同年10月のメキシコオリンピックに出場
1969年(昭和44年) メルボルン大学を招待した全日本選手権エイトで優勝2連覇達成
1973年(昭和48年) 全日本選手権エイト、3回目の優勝
1975年(昭和51年) ボート部監督退任 勤務地関東となり、以後、日本漕艇協会(ボート協会)、
参与、顧問を歴任、日本ボート界発展に寄与す
2017年(平成29年) 11月15日ご逝去、享年90歳

第19回 オリンピック競技大会報告書

漕艇

監督 四方 久男

1. 選手選考の経緯

オリンピック・メキシコ大会に対する強化計画は42年度全日本選手権までは自主トレーニングを主体に協会指導を行ない、41年度には第2回世界選手権(ユーゴ)に付フォアとシングルスカル、42年度には北米選手権(カナダ)にエイト、付フォア、シングルスカルを派遣し戦力の増強を図ったが、年来の悩みである学生主体のクルーにあっては毎年優秀選手の卒業に伴い、そのクルーの弱体化防止は社会事情もありメキシコ大会まで保有することのむずかしさに苦慮した。

長期にわたるトレーニングを必要とするため、社会人クルーにあっては勤務の余暇を利用して練習するにしても、職場の関係で十分な時間をとることもできなかったが、従来にない成果があがったことは、今後の指針に大いに役立つものと思われる。

以上の特殊事情から、メキシコ代表の決定時期は申込みギリギリの43年8月末の全日本選手権大会と決定し、次のような計画をたてた。

42年度全日本選手権における優秀クルーを強化クルーに指定し、同年12月中旬にトライアルを行ない、指定クルーに対し他クルーの挑戦レースを行ない、その結果により新しく強化クルーを選定した。同様、挑戦レースを43年3月24日、5月25日、6月23日、7月18日の4回にわたり目標タイムを設定し、そのタイムを突破することを目標とした。

6月と7月にはJOC委員の査察を受け、オリンピック代表選考の資料とされたが、コースコンディションに左右され、JOCが目標とした7月には派遣の承認を得るに至らなかった。各クルーは協会の目標にしたがい8月の全日本にすべてを集中しているため、その時点における成績によって派遣の是非を決定するようJOCの承認を得てその成果を待った。

全日本における成績は、エイトにおいて協会目標タイムの6分5秒以内に対し、同志社大学が6分1秒4を記録した。

この記録は、大会までには上昇することも考えられるとして派遣決定をみるに至った。

シングルスカルの伊藤君は6月のチャレンジ・レースにおいて派遣決定をみており、従来にないスカラーとして大会における活躍が期待された。

しかし、高地対策については、その必要性は十分承知しながら、国内においてはボートとして利用する適地もなく、ブツケ本番でいくより仕方がなかったため、早目にメキシコ入りすることにした。

使用艇の搬入においては、台風シーズンに遭遇して予定期日に出帆不能となり、約1週間の遅れをみた。そのうえアカプルコで港湾ストにあい、揚陸地の変更等でまたまた3日間の遅れをみ、現地における練習に大きな支障のあったことは誠に残念であった。

2. 強化策および臨戦対策

(1) 国内における強化策

①エイト・クルーの大半を占める若い選手について、技術、体力、精神面で鍛えあげ、平均レベルの向上をはかった。クルーの構成は4年2名、3年4名、2年2名。

②ボートにおける高地の影響はどの程度のものかはわからなかったが、呼吸循環システムを鍛えるために、練習内容をインターバルと長いライトパドルにしぼり、あわせて陸上ではインターバル・ランニングを行なった。

③国内予選における実力(6分1秒4)を東京大会での西独クルー(5分54秒)と比較した場合、ウィークポイントとして目立つのは第1クォーター(スタート~500m)と第3クォーター(1,000m~1,500m)である。500mで約1艇身の差が予想されるが、国内予選を通じてスタートでの負けを知らないクルーにとって、これは致命的なウィークポイントである。以上の対策として次のことを試みた。

(イ) 第1クォーター(スタート)

従来のスタートはダッシュ6本(P60)、力漕15本(P50)および10本(P40)であったが、これにP43の力漕を10本加えてみた。結果は従来のスタートに比べてへばりがひどく、そのうえコンスタントの伸びもなくなり、逆に500mのタイムを2秒ほど悪くすることとなった。約10日間にわたってへばりの克服を試みたが、スピードと体力の限界を感じたので、従来のスタートで臨むことにした。無風の条件で500m 1分26秒のラップタイムを破るには、体力、技術、用具(オールなど)について抜本的に研究しなおす必要がある。

(ロ) 第3クォーター

タイム落ちの直接原因は技術面にあった。すなわち、キャッチの戻り、フィニッシュのはね上げ、フォワード速度の不一致、蹴りの乱れである。しかし、第3クォーターは心身ともに最も苦しいところなので、技術的な乱れは体力の消耗によるものと考えられる。また、こうした乱れがキャリアの少ない若い選手に一律に現われたことから、短時日に克服することはむずかしいと思われる。

(2) 現地における臨戦対策

①クエルナバカでの低地休養は取りやめることにした。理由は、(イ)自艇の到着が10月2日(レース10日前)になり、正味の乗艇練習は1週間しかできないということ、自艇とはいえ1ヵ月以上も乗っていなかったので慣れる必要を感じたため。(ロ)最初の1週間は借艇による漕ぎにくさと、高地の予想外の影響のために予定していたスケジュールが消化できておらず、レース・コンディションにもってゆくに約1週間ぐらひは必要だと判断したためである。

②高地の影響は予想以上に大きく、当初のスケジュールを大幅に修正しなければならなかった。水上練習でのパドルは15本程度、ライトパドルは30本程度で頭痛を訴え、陸上でのランニングも落とさねばならなかった。パドルの本数は1週間を目標に、毎日少しずつ本数を多くしていったが、50本のパドルをこなすのに10日間を要した。

スタート・ダッシュの消耗もはげしく、力漕時のピッチを2つ落としたが、コンスタントにつなぐのに2週間を要した。

疲労の回復力は平地に比べて半減し、1日の休みでは80%ぐらひしか回復しなかった。疲労の累積は目にみえていたが、一方スケジュールの消化に追われて、エイトは低地休養も取りやめて練習を強行しなければならなかった。

予選の時点では、スタートなしのコンスタント・ピッチで1,000mを引けるようにはなっていたが、スタートをつけた場合は700mでつぶれる状態だった。酸素不足に対する選手の恐怖心も大きく、レースではこの恐怖心がスタートから現われてしまった。

③国際レースの経験をもたない選手たちをいづらかでも雰囲気慣れさせるべく、練習時には可能な限り外国クルーと並べさせた。これは、かなりの効果をあげたように思う。

次に、シングルスカルの場合もエイト同様、国内の強化策は、呼吸循環システムの機能の向上を目的にインターバル・トレーニングを中心に行なった。しかも従来は80%程度の力でペースの配分づくりを中心に行っていたものを、心臓、肺臓に負荷をより以上かけるため、全力によるインターバル・トレーニングとした。また国内予選の行なわれるまでは、100mを22秒で漕ぐペースづくりを行なったが、これを少しでも向上させるよう技術面における艇速に対してマイナスとなる要素を減らす努力を行なった。

一方、現地における臨戦対策としては、高地の影響の度合いをはっきりつかみ、それを生かして高地への順応を行ない、次にシングルスカルの2,000mのペースへと結びつけることを、試合前までの3週間弱の期間をそれぞれ約1週間ずつあてて行った。

3. 試合経過および戦評

エイト予選

10月13日 13時25分 コンディション東南東(横)0.2m

[経過および戦評]

スタートは西独のフライングがあって、定刻より10分遅れて再スタート。スタート・ダッシュは横一線。250mで西独とカナダが飛び出し、他はだいたい平行。300m付近で日本とメキシコが落ち、他は西独、カナダ、オーストラリア、チェコの順でよく艇速を伸ばした。700mあたりから日本はメキシコにじりじりと差をつけたが、これはメキシコの落ち方がひどかったためで、日本の動きはますます鈍くなり、リズムも出ないままトップ・グループとの差は大きくなる一方だった。1,700mからはフォームも完全にくずれ、バランスさえとれないまま、ただ気力だけで動いている状態となって、メキシコにも逆転された。

スタート・ダッシュとそれに続く力漕は互角でまずまずの出来だったが、コンスタント・ピッチに落とす際に呼吸を乱し、リズムを失ってしまった。このコンディションならば、500mを1分28秒、1,000mを3分3秒ぐらいで漕げるはずだったが、コンスタントを悪くした原因として最も大きいのは、後半に対する不安であったらと思う。練習では1,500mを1度引いたきりで、後は1,000mまでしかやっていたところへもってきて、レースの前に、船台で倒れて次々と担架で運ばれてゆく前漕者たちの姿を見て、大きなショックを受けたようだった。次に疲労の問題である。自艇が到着して本格的なトレーニングに入ったのは10月3日であったが、ちょうどその頃から不慣れな食事による

食欲減退がひどくなり、体重も練習量からは考えられないくらい、減少しはじめた。練習時のタイムも11日をピークにして下降線をたどった。

700mあたりで若い選手たちがフォームをくずしてしまったが、この現象はメキシコへ入ってからの著しい特色であり、選手のキャリアによる格差がはっきりと表面に出た。

エイト敗者復活戦

10月15日 11時50分 コンディション 北々西(斜め逆) 1.6m

[経過および戦評]

予選のときにも累積疲労が感じられたので、前日(14日)は午前中を休み、午後のみ軽い練習をしたが、疲労は抜けなかった。

スタート・ダッシュと力漕は横一線で、予選同様まずまずの出来であった。コンスタントに落とす際にやはり乱れてしまったが、その後よく持ちこたえて、500mではトップのソ連に1艇身でついていった。しかし、700m付近から若い選手が次々にフォームをくずしはじめ、古い選手も1,000mを過ぎるころからは1人また1人とつぶれていった。1,700mからメキシコにまたしても逆転された。

エイト順位決定戦

10月18日 13時 コンディション 東 0.8m

[経過および戦評]

16、17の両日はいかにして疲労を回復するかという命題だけが残った。休養の方法としてはクエルナバカへ降りることも考えられたが、一方、現在のような希望のない状況でコースを離れば、戦意を喪失する危険もあった。結局、気力の持続に的をしばり、練習を続行することにした。

レースは良いスタートを切った。250mまではヨーロッパ勢と並び、メキシコは半艇身遅れた。300mでオランダがややリード、日本はコンスタントでもリズムを保ち、東独、イギリスにキャンバスの差でつづく。500m…。

600mあたりから艇速が伸び、イギリスとの差を1/3艇身とつめたが、前2回のレース同様700mでくずれてしまった。気力は充実していたものの、疲労が激しく、当日は朝から体調をこわしていた選手もあって、1,000m以後は今にも倒れそうな状態となり、メキシコにも逆転されたうえ大差をつけられる結果となった。

[総評]

外国クルーについて見聞したところをまとめると次のとおり。

(ソ連)

コーカサス地方の高地でトレーニングを積んできているとかで、9月末にわれわれが到着したときには、すでに高地の影響らしき兆候は練習タイムにもみられなかった。

優勝候補の筆頭と目されていたが、レース時には調子をくずしてしまった。

(アメリカ)

コロラド州の高地でトレーニング中とのことで、メキシコ入りはいちばん遅く、レースの1週間前だった。

コースに入ったときはすでにレース・コンディションは整っていて、補欠選手の陸上でのランニングをみても、高地対策は万全といった印象を受けた。

(ニュージーランド、カナダおよびヨーロッパ勢)

メキシコ入りはニュージーランド、西独、オーストラリアが9月初旬で最も早く、オランダ、カナダ、イギリス、チェコはやや遅れて9月中旬とのことだった。われわれが到着したころには西独、オーストラリアも500mを引くのがやっとなと、とても2,000mを引ける状態には見えなかったが、それから、1週間ほどの間に急速に調子を上げていった。

(日本)

初めの1週間で借艇していたためもあって、本格的なトレーニングは自艇到着後の10日間となった。

高地への順化はヨーロッパ・クルーの例でもだいたい3~4週間で要しており、10日~2週間ではちょっと無理があったようだ。疲労は聞いていたとおり2週間で限界にくるようだった。また疲労の回復には、高地での休養はあまり効果はなく、やはり低地休養を必要とするように思われた。

シングルスカル予選

10月13日 10時30分 コンディション 北西 (斜め逆)2.2m

[経過および戦評]

スタートは各艇並んできれいに飛び出し、日本は練習当時のペースで順調に500、1,000mを3位で通過する。1,000mをトップで通過した西独はピッチ37と高く多少オーバー・ペースぎみで飛ばしており、日本との差は1,000mで約3艇身と開いた。しかし2位との差は1艇身弱と水があかず、1,000mから勝負を決するところとなる。ところが、1,000mを過ぎるころから高地の酸素不足の影響を極端に受け、疲労が 一気に出てきてしまった。その結果、脚、肩のしびれにより身体が思うように動かなくなり、艇速がまたたく間に落ちて、1,500m手前でアルゼンチンに無抵抗のまま抜かれ、さらにチェコにも追いつかれ、1,500m過ぎ各国選手がラストスパートでピッチを上げる中を、フラフラの状態 で気力のみでゴールインした。

シングルスカル敗者復活戦

10月15日 10時 コンディション 風なし

[経過および戦評]

日本、ソ連、イギリス、チェコ、スイスの5艇によるレース予定であったが、試合前のウォーミングアップでスイスの選手が高地の影響を受けて倒れたため、4クルーによって争われることとなった。スタートは日本、ソ連、イギリスのフライングにより再スタートとなったが、2回のフライングを行なうと失格となるため慎重になりすぎ、他艇に約半艇身も出られる結果となった。予選では高地の影響で後半のタイム落ちがひどかったため、これを防止する目的で敗者復活戦ではオールのアウトボードを約1.5cm短くした。これが影響して、500mでは他艇にさらに差を広げられ、トップのイギリスに2艇身、2、3位のソ連、チェコに1艇身と離される。そして700m付近では3位チェコに2艇身とされたが、1,000m 前後では良いリズムにのり、じりじりと追い上げ約1艇身差と後半への希望をつないだ。しかし1,500mを過ぎると他艇はラストスパートに入り、1艇身までにつめた差を、ここから大きく開かれ、準決勝進出への道を失った。

予選、敗者復活戦を通じ、1,000mまでは目標ペースで順調に漕げたが、問題は1,000m以降で、これが高地のためにひどい影響を受けたといえよう。結局、この点は高地の苦しさを乗り切れなかったためではあるが、特に漕艇という非常に体力、精神面できつい種目においては、試合までに3週間弱の高地練習では順応しきれない。外国クルーは9月初めにすでにメキシコに乗り込むか、あるいは自国で高地トレーニングを行っていた。日本の場合、高地の練習場となると適当な場所がないのであるから、

少なくとも9月初めにはメキシコ入りすべきであった。結局、練習のスケジュールも高地の苦しさで当初の予定をこなし苦しさを克服するどころではなく、逆に疲労が蓄積されてゆき、スケジュールを変更せざるを得ない状態となった。

4. 彼我の戦力分析と将来の展望・対策

今回のオリンピック・レースにおける外国クルーとの力量差には、高地という特殊条件があるため分析がむずかしいが、戸田における記録とメキシコにおけるレース2週間前の外国クルーのタイムなどから推定すると、およそ15秒程の差があるものと思われる。15秒差のうちの最も大きなものは、なんとといっても体力差であるが、しかし技術、艇、オールによる差もかなりの部分を占めているように思われた。

体力差は早急に解決することは不可能であろうが、技術面や用具については改善が可能であるし、またやらねばならないことである。技術面のレベルアップとある程度の体力増強の方法として、まず考えられるのがナショナル・クルーの編成である。

ナショナル・クルーの成功例として、ニュージーランドについて聞きかじったところを記してみたい。

東京大会におけるニュージーランドは日本以下の成績であったが、その後ナショナル・クルーを編成し、3年後(昨年)には北米選手権で優勝するまでになった。今回のオリンピックでは、昨年のクルーのうち2名が入れ替わったとのことで、選手も学生、社会人の混合である。決勝の成績こそ4位に終わったが、予選ではアメリカ、ソ連、東独、オランダといったトップ・レベルのクルーを相手に楽勝しており、舵手付フォアの堂々たる優勝とともに特筆されるべきことだと思う。

次に考えられるのがキャリアの充実ということである。キャリアは主として技術的な問題のように考えられるが、体力の効果的な消費といった面からみれば、消極的ではあるが体力面の解決にも役立つものである。現在日本のボート界は実業団、大学、高校という3層から成っているが、これら3者はそれぞれ異なった目的に向かって強化努力を傾けている。オリンピックを頂点とするシェル艇の強化となると大学層に限定され、他はわずかに二、三の実業団を数えるのみである。大学の4年間では国際レベルのキャリアを期待するのは無理であり、これをヨーロッパ並みにもってゆくためには、高校、大学実業団という一貫した養成過程が必要だと思う。この点については他の競技種一特に球技一をみれば明らかである。そのためには実業団も高校もシェル艇に統一せねば大きな効果は期待できない。一部の大学には高校の経験者が入っているが、高校におけるナックル艇の経験者は体力面以外にはほとんどメリットがなく、技術的にはマイナス要素もかなり出ている。ナックル艇とシェル艇の相違は、野球における軟式と硬式の相違のようなもので、高校や実業団がすべて軟式になった場合、硬式のプロ野球のレベルは極端に低下するであろうと思う。

艇の改善については協会技術部と造船会社に頼るほかないが、現在の艇は理論に傾きすぎて潜手の乗りやすさ、漕ぎ易さといった面や、レースの過程で艇速にかなりの波がある点を考慮する必要があるのではないか。

オールについてはクルー単位による経験的な改善が可能であると思うが、手法の問題をも含めて、各コーチ間の意見および経験の交換を密にすることが必要であろう。

以上の諸問題が解決されれば、国際レースにおける優勝はともかくとして、決勝進出のチャンスはつかめるものと確信している。

次にシングルスカルについて考えてみると、もちろん体力、技術面で若干の劣勢は

「人間教育」で名門復活

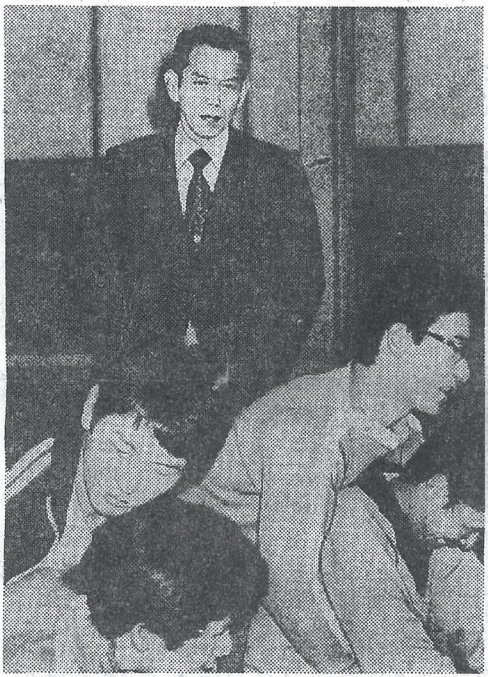
同大ボート部 四方久男監督

アマスポーツの世界で指導者の存在は大きい。指導者の選手の間には、現在社会が薄れゆく風が、師弟関係が流れているのだ。若い選手は、先輩がその師、から教わるのは、単に技術だけではない。優勝をともに喜び、敗戦の手をとりあひし、練習の苦しみ、そしてきつい訓練、体をつつ合つたり、先輩から受ける人間的影響、しかも、とも大きいといえるだろう。次代の選手にスポーツの本質を正しく伝えよう、日夜自ら手打ちつこれら指導者にスポーツをあててみよう。

主体性重んじる 選手から厚い信望

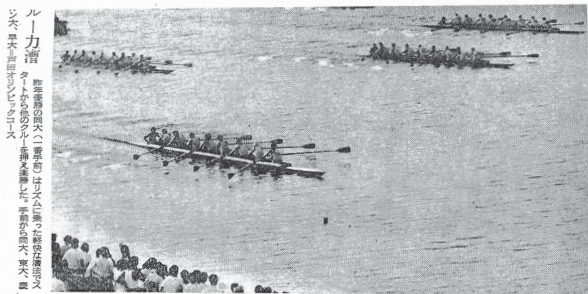
選手から厚い信望

四十二年、四十四年と全日本選手権を連覇した同大ボート部は、昨年から三たび制覇して、シエネエスを払い、小艇を捨てエイト一本、三たび制覇して、シエネエスを払い、小艇を捨てエイト一本、三たび制覇して、シエネエス



喜び育てる

「選手個人が自ら決断し、自ら責任をもち、自ら努力を怠らぬ」というのが、同大ボート部の指導方針だ。選手は、監督の指示を盲従するのではなく、監督の指導を「喜び育てる」ことで、自ら責任をもち、自ら努力を怠らぬという姿勢を身につける。監督は、選手を「喜び育てる」ことで、自ら責任をもち、自ら努力を怠らぬという姿勢を身につける。



慶大(2位)に1艇身1/3 関西クルー初の2連勝

エイト決勝成績 (距離2000m)

ゴール	500m	1000m	1500m
同大	6分4秒3	1分27秒0	2分59秒8
京都大	6分5秒2	1分28秒4	3分2秒3
同志社大	6分10秒4	1分32秒0	3分4秒7
東洋大	6分11秒5	1分33秒5	3分3秒4
中央大	6分16秒7	1分38秒0	3分7秒1

メキシコ(2)の汚名そぐ 興奮、涙の四方監督



メキシコボート部と交流した同大の選手たちが、お祭り気分の中で優勝の喜びを分かち合った。

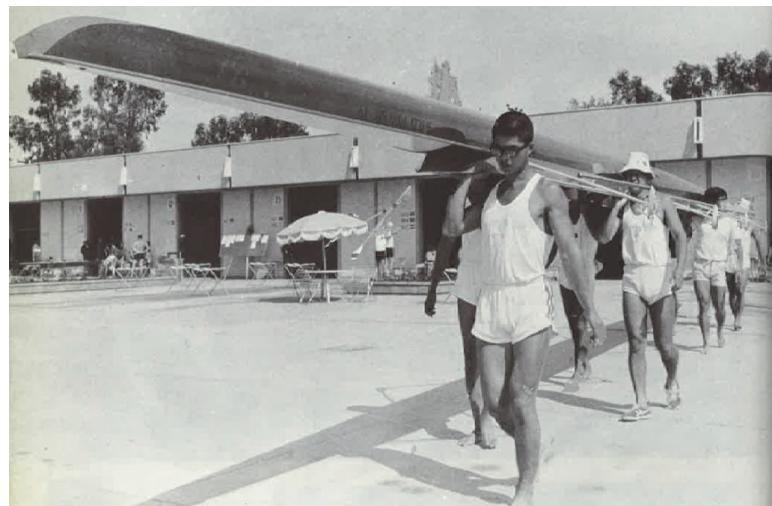
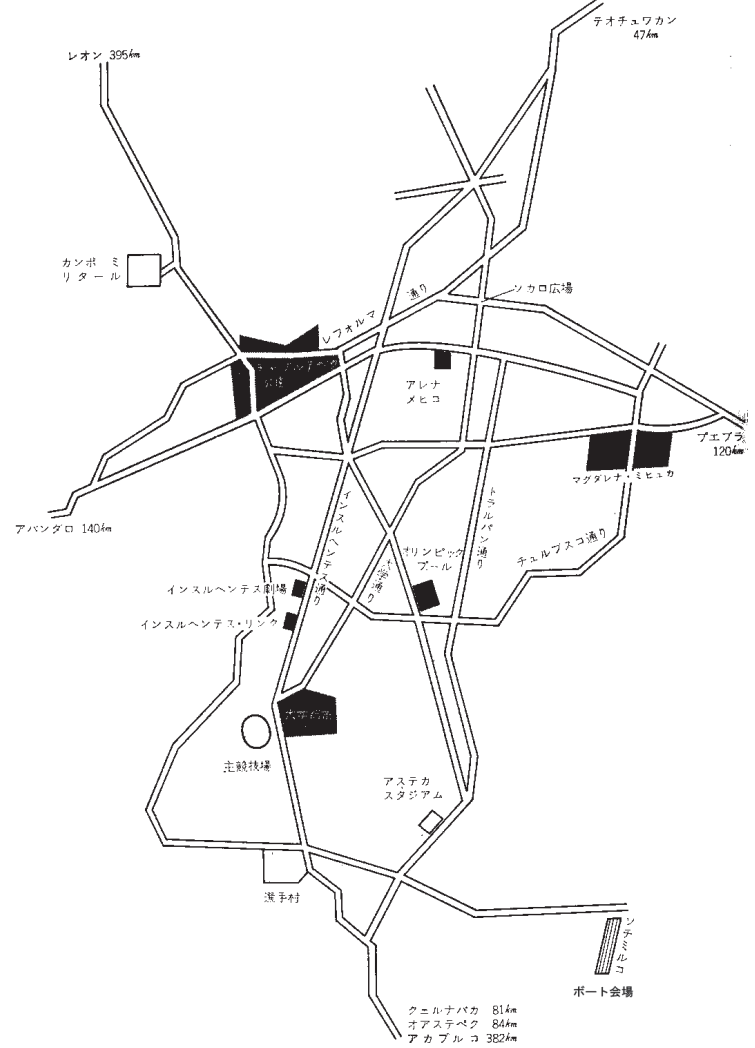
「メキシコ(2)の汚名そぐ」というのが、同大ボート部の指導方針だ。選手は、監督の指示を盲従するのではなく、監督の指導を「喜び育てる」ことで、自ら責任をもち、自ら努力を怠らぬという姿勢を身につける。監督は、選手を「喜び育てる」ことで、自ら責任をもち、自ら努力を怠らぬという姿勢を身につける。

努力とチームワークを重視
「選手個人が自ら決断し、自ら責任をもち、自ら努力を怠らぬ」というのが、同大ボート部の指導方針だ。選手は、監督の指示を盲従するのではなく、監督の指導を「喜び育てる」ことで、自ら責任をもち、自ら努力を怠らぬという姿勢を身につける。監督は、選手を「喜び育てる」ことで、自ら責任をもち、自ら努力を怠らぬという姿勢を身につける。



全日本レガッタ、エイト優勝の同大ボート部監督、四方久男氏。

メキシコ市内の会場図



讚美歌 312番
いつくしみ深き

いつくしみ深き 友なるイエスは、
罪とが憂いを とり去りたもう。
こころの嘆きを 包まず述べて、
などかは下ろさぬ 負える重荷を。

いつくしみ深き 友なるイエスは、
われらの弱きを 知りて憐れむ。
悩みかなしみに 沈めるときも、
祈りにこたえて 慰めたまわん。

いつくしみ深き 友なるイエスは、
かわらぬ愛もて 導きたもう。
世の友われらを 棄て去るときも、
祈りにこたえて 労りたまわん。

讚美歌541番
頌 栄

父、み子、みたまの
おおみかみに、
ときわにたえせず
みさかえあれ。

故四方久男監督追悼記念式

2018年6月10日(日曜日) 11時
於:新島会館

同志社艇友会

故四方久男監督追悼記念式

司式・進行 同志社大学神学部教授

水谷 誠

奏 楽

松原 令子

前 奏 奏楽者

黙 禱 一同

主 の 祈 り 一同

聖 書 司式者

メ ッ セ ー ジ 司式者

祈 り 司式者

賛美歌 312 一同

故人略歴・感話 艇友会会長：新井 喜範

頌 栄 541 一同

終 禱 司式者

後 奏 奏楽者

主の祈り

天にまします我らの父よ、

願わくはみ名をあがめさせたまえ。

み国を来らせたまえ。

みこころの天になるごとく

地にもなさせたまえ。

我らの日用の糧を今日も与えたまえ。

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、

我らの罪をも赦したまえ。

我らを試みにあわせず、

悪より救い出したまえ。

国と力と栄とは限りなく汝のものなればなり。

アーメン。

四方監督に率いられ、メキシコオリンピックに出漕してから、早、50年が経過しましたこの間、ボート会場はじめ、たくさんの場所で、ずいぶんと多くの時間を四方さんと共に過ごさせていただきました。明るく洒脱でユーモアを交えたお話を聞かせていただくのがとても楽しみで毎回幸せな気分になりました。四方さんについての想いを少し申し上げ追悼の辞とさせていただきます。一つ目はその素晴らしいお人柄についてです。私はあちこちのボート会場で他大学の初対面のそこそこ年配のOBの方々とお会いする機会がありますが、こちらが同志社の関係者だと分かると、まず帰ってくる言葉は、四方さんはお元気ですかがほとんどです。しかもなつかしさと敬愛の情の籠もった響きで仰られます。昭和40年代に入り同志社を率いて突如として戸田を縦横に席捲した四方監督の指導者としての力量は広く伝わっていましたが、実はそれ以上に関係者に受け入れられていたのが、その、素晴らしいお人柄だったのです。私がかねてから、優しさで人を包み込み、傍に居るだけで居心地の良さを感じさせられる、あのような性格はどうすれば身につけられるのか興味があったのですが、ある時から四方さんの学友の方たちとご一緒する機会があり、その時感じたのですが、その方達も性格はそれぞれですが、基本的な雰囲気は、よく似通っていて、誰にも心優しく接し、細やかな気配りをされるのです。それで気づいたのですが、戦前から終戦間無しにかけての大学生は今と全く違う恵まれた環境の中で育ったのではと思いました。

私の身近なところで、この時代に大学生だった人など一人もいません。また、勉学の傍らと云え、ボート部、馬術部、自動車部、に所属していたのです。今で言うところの庶民とはかけ離れた富裕層の階層の方達です。しかも教育環境に恵まれた人たちでいわゆるエリートと呼ばれる人たちだったのです。あの人格、教養は一朝一夕に身につくものではないことを悟りました。と同時に、魅力あふれるお人柄の四方さんから学ぶことは多く、長く傍で過ごさせていただいたことを幸せに感じています。

もう一つは指導者としての四方さんの信念についてです。

四方監督のそれは、若い学生たちの伸びようとする根源的な力、可能性に全幅の信頼を寄せていることだと思います。一人一人の個性を認め、決して指導者の好みに合わせようとしません。型にはめようとしません。練習メニューはコーチに委ね、ご自分は黙って見守っているだけです。もちろん学生たちの意見を聞き、悩みごとの相談に答えながら、基本は一人一人の内から意欲、力が湧き上がって来るのを待っておられたのだと思います。この辺の信念は多分同志社高商時代のボート部で培われたのでしょう。終戦前後の用具もない、金もない、監督、コーチもない状況で、主将として数人の仲間と部の再建に奔走し、短期間で練習再開に漕ぎつけその年の全日本選手権で2位になったということで、学生主体でも本気で取り組みればなんとかなるという確信を得られたのでしょう。また、若木が根を張り、枝葉を茂らせ成長するのを見守るだけでなく、その成長を阻害する要因もよく見極めておられました。このことについて今でも強く記憶に残っていることがあります、昭和44年の

朝日レガッタで我々の対抗エイトがスタート直前に、あまりのラフコンディションに抗議の意味も込めてレースを棄権しようとして、スタート位置を離れた時のことです。岸で見ておられた四方監督が戻れ、戻れと大きく怒鳴っておられるのです。あまりの剣幕にしかたなく艇をもどし、スタートをやり直したことがあります。前年度のメキシコオリンピック出漕クルーを6人も擁し、大会一の注目を集め、自他ともに認める優勝候補クルーの学生に相応しくない驕り高ぶった行為を断じて認めることができなかつたのでしょう。試合後相当叱られるのを覚悟していたのですが、さほどでもなく拍子抜けしたのを覚えています、内心、情けなく寂しい思いをされていたのではなかつたでしょうか

四方さん、メキシコから50年、いま、ボート部は大きく躍動し始めています。今年、ボート部は半世紀ぶりに日本代表選手を輩出しました。来月の世界選手権に挑みます。長かったなあ、今までなにやってたんだと叱られそうですが、この間に蓄えられたノウハウも多くあります。学生スポーツの本質を見失わず、過去の経験を活かし決して後戻りすることなく、正攻法で頂点を目指します。今日は敬愛してやまない偉大な先輩の一端に少しでも触れてほしくて、監督以下、主将、主務。女子マネージャー、そして現時点での精鋭対抗クルーにきてもらいました。四方さん、見てやって下さい。そして一言仰って下さい。なつかしいあの少ししわがれた声で、新井、勇ましいのがそろってるやないか、、、と長い間ボート部に限りない愛情を降り注いでいただきました。本当にお世話になりました有難うございました。

平成30年6月10日

同志社艇友会 会長 新井 喜範

四方久男さん略歴

- 1927年（昭和2年）京都市下京区で生まれる
- 1944年（昭和19年）4月同志社経済専門学校へ入学 ボート部へ入部
同年9月学校閉鎖、勤労働員される
- 1945年（昭和20年）10月復員 同志社高商授業再開、2年生として復学
ボート部主将として再建に着手
- 1946年（昭和21年）3月練習再開する 同年11月の第一回全日本選手権
エイトにて東大に次いで2位となる
- 1950年（昭和25年）3月同志社大学卒業
- 1964年（昭和39年）同志社大学ボート部監督に就任
- 1966年（昭和41年）全日本選手権エイト第3位
- 1967年（昭和42年）全日本選手権エイト第2位
- 1968年（昭和43年）監督就任5年目、全日本選手権エイトで初優勝、同年
10月のメキシコオリンピックに出場
- 1969年（昭和44年）メルボルン大学を招待した全日本選手権エイトで優勝
2連覇達成
- 1973年（昭和48年）全日本選手権エイト、3回目の優勝
- 1975年（昭和51年）ボート部監督退任 勤務地関東となり、以後、日本漕
艇協会（ボート協会）、参与、顧問を歴任、日本ボート界発展に寄
与す
- 2017年（平成29年）11月15日ご逝去、享年90歳